



伴勢物類圖類抄

下

特別  
イ 4  
3163  
209(2)



貴  
14  
3163  
209(2)

新編抄巻第三



しり男多しなりとあるは女はわひりなりなりなりなり  
母くをわらわらりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
張くくをりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
えわくをりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
るりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

母くをわらわらりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
し張くくをりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
乃ちなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
たえれしなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

三十一

後も死に於ては... 推して... 今も... 物... 是も...

む... 動物... 邦... 一... その... 人... 家... 家... 家... 家... 家...









見るともたのほあへしうらむの計もなれにたをよめ  
あまのいれえうらむをたのほしうらむの計もなれにたをよ  
れをもよめしうらむの計もなれにたをよめ

若田福んりうらむの計もなれにたをよめ  
わいふらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
大ぬらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ

たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ

ひう一男をたりしうらむの計もなれにたをよめ  
こらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ  
たのほしうらむの計もなれにたをよめ



子孫の世に傳へし法なり

むしおとこのうらみのいとおもきなりきりかたなり  
 うらみの糸をよみあはらうきと人の法らんこそ  
 きよなる業平の妹をさうらふ積りてこそ  
 いのちと不度一日ひく懐胎するに  
 若乃はよむせくぬるこゝろに好む妹をさうらふ  
 一と心せし人共ふらむ美をさうらふ  
 ひまきくやめんとくると思ひふ業平をさうら  
 くのこりけ

と業平のきこめはしよきの妹をさうらひけり  
 法説初まらめりト一美をいふ人さうらふ字は  
 と業平大切はけり見たりけりけりけりけり  
 きよなる業平の妹をさうらふ積りてこそ  
 いのちと不度一日ひく懐胎するに  
 若乃はよむせくぬるこゝろに好む妹をさうらふ  
 一と心せし人共ふらむ美をさうらふ  
 ひまきくやめんとくると思ひふ業平をさうら  
 くのこりけ

てうをり梵網經十卷禁戒之中二嫌戒を不犯  
 生乃を母姉妹六親の嫌を忌むるを不犯  
 羅夷罪と云ふは凡そ乃らまのいふるありけり

とるらんあしきうものありあはなれんしつしきよく  
うぐむいふうのうけりあめとまどあしひしちい  
りくよんをせむしゆ末と出ひらうあ後は露殿うう  
ううあくとるあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あくとるあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
ひしあめとまどあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい

このことばはしをえぬあはなれんしつしきよく  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい

とるらんあしきうものありあはなれんしつしきよく  
うぐむいふうのうけりあめとまどあしひしちい  
りくよんをせむしゆ末と出ひらうあ後は露殿うう  
ううあくとるあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
あくとるあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
ひしあめとまどあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい

わさあは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
電光朝露あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい  
て目新しうけりあめとまどあしひしちい  
あは徹しくうけりあめとまどあしひしちい

新しきまゝに地をくもあつた方のをささるうからま  
興おこらおとさ乃んぬさなるぬさくくいるるあり

みれとこ

吹風よこころれ梅からくはれわぬこのこころんかこく流る

今年このとし梅改うめかへれりきざくさきかこくを年のさく

かむふり梅うめりきざくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

んちこのこかこくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

ていさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

乃こころ人のこころをなごころ人ひとのこころをなごころ人ひとのこころをなごころ

又書一

乃あまのこころさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

なごころ 猶なごころ 文ぶん 亦また 如ごと 昼ひる 多おほ 有あ 辰あした 昏くろ 既すで 合あ とわらふ

みれとこ

乃あまのこころさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

前まへのあまのこころさくさくさくさくさくさくさくさくさく

あ乃こころさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

一あまのこころさくさくさくさくさくさくさくさくさく

流ながるまのこころさくさくさくさくさくさくさくさくさく

わさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさく

物もの 終はるの初はつめひわらひあまのこころさくさくさく

久ひさきよのこころさくさくさくさくさくさくさくさくさく

ひー男おとこ人のああ載のりはは華はなららくさく

うー人ひとのああ載のりはは華はなららくさくさくさくさくさく



沙多きふいといふをぬきうよなりひつらふを  
始<sup>よ</sup>始<sup>ま</sup>りつるなり

ひー男はまならりるふふよひなり

幼<sup>ち</sup>幼<sup>ち</sup>ぬきぬきといふありいぬありなるありぬん

ぬらふ天後乃がよきたのむとありなるありぬん

とありておまのむとありぬきぬきぬきぬきぬき

影<sup>かげ</sup>影<sup>かげ</sup>りるありぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ならぬありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

なりひ乃ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ありなりありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ひー男はひぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ひー男はひぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

思ふといふありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

そありよありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

よありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

いふぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ひー男はひぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

お神とありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

とくく心遊を露少く一系女志社を後行りよい  
はくもたれた形一房をまきとも夕を露下くわきハ高は  
いかりありぬ神を妻家の座より取くる遊ハ昔ハ本の露  
あらをも海なるいどこのあまのくこらるれその羽は揚ちり  
し一男一人一きぬ物行のひさらけ建てる人女ありとい。  
急いぬわまらるるもやどるるふ家くかどるるはけらる  
あやまらるる露と年月はるる海はせんいふといふいれも  
たふらるるひもあきつらうんいふ一むれりのは亭勇一  
年月とよりありて是を家くかどるる羽は揚ちりよか  
親く一あり年月とあきつらうんいふ一むれりのは亭勇一  
く一のまはらるるあまのまはらるる一むれりのは亭勇一  
いぬといふいふいふいふいふいふいふいふいふ

しんはけいといふことろなるものかたけいもあきいふいふいふいふ  
あけりくなるものかたけいもあきいふいふいふいふいふ  
そるれ女くもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
入るる男は内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお

あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお  
あきわの中らりては内親は内くい男のおあきをいひくもあきわの中らりては内親は内くい男のお













いふを拙稿乃終と大徳に御...  
思見抄

ひし年をうらまへし...  
るる人...  
ての...  
よ...  
わり...  
そ...  
く...  
ち...  
お...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

と懐くまの女をわくわくとしよめるよき地を  
のちにおもひをたしめるありきと又おもひあり  
とひかきあへるよきとせむしとふかきよき  
ほろいぬんといふあり  
申す乃ちおもひとせむしとふかきよきを  
とひかきあへるよきとせむしとふかきよきを

世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに  
世くはまの世とていふに

子一人をうくるかむりなるまの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて  
まの娘あつて

いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに  
いふ娘とていふに

四二

の男がまゝにうづまりかたしかりにさう業平のうぢや  
 上白せよひいせあぬはくさくさかきあはく面影のいぢ  
 わあうら九十九の子をよぶ北の城ふはすすの海  
 一く年乃をうぢまうごころうごころまをさばぬ  
 不業平の人をあらひ持ちまをばありは乃はよされ  
 くらいらはひくもごころうごころまをさばぬ  
 くらいらはひくもごころうごころまをさばぬ  
 くらいらはひくもごころうごころまをさばぬ  
 くらいらはひくもごころうごころまをさばぬ  
 くらいらはひくもごころうごころまをさばぬ  
 くらいらはひくもごころうごころまをさばぬ

業平久業ありたははば女乃せうけう女のあはれ業  
 平乃女のあはれやうやうやう  
 さひちよはばくあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 はあな今宵十回よはばばあはれあはれあはれあはれあはれ  
 御んえ路のうぢとわり下向をうぢあはれあはれあはれあはれ  
 今宵りやうぢ毎夜乃はせりあはれあはれあはれあはれあはれ  
 て男女乃中をばくまゝにうぢあはれあはれあはれあはれあはれ  
 うぢあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 乃あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 をいんあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 業平あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 人をあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or a similar European language. The text is written in dark ink on aged, slightly yellowed paper. It consists of approximately 15 lines of continuous writing.

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or a similar European language. This page contains approximately 15 lines of text, continuing from the previous page. There are some decorative flourishes at the beginning and end of the text.

Vertical text on the left margin of the first page, possibly a reference or a note, including numbers like 111 and 112.





しきりのありぬくかいはしつゝありしはかへみせりしは  
味ねふれははるがうひかくしむかひかふせんさう  
かまらぬめくかきまはれしむらりなる  
ははしははらりあひひのたはれははらり  
らんれむひひせしむくのかんひん  
らんらんまはらぬあはらり  
まよひひひのたはれ

はらぬれははらぬのむらひははらぬ  
くらんぬ乃外はあしむかひあり見  
は二条の佐々木忠仁のまはらぬ  
もはらぬのむらひははらぬ  
あはらぬのむらひははらぬ

てち翌朝あつるりそのありけりあ上人  
とくめくあつるりあはらぬのむらひ  
日乃夜あつるりあはらぬのむらひ  
ののど上りあつるりあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ  
あはらぬのむらひあはらぬのむらひ

乃當上せらるゆへに察しり女嬬といふ女はくはる  
乃ゆと後まろに教よ人をしむるはくはるに  
後之職負令曰

五司

尚取一人掌供奉輿徹膏沐燈油火燭薪炭事

典二人掌同尚五女嬬六人

掃司

尚掃一人掌供奉床席洒拂浦設之典掃二人掌

同尚掃女嬬十人

かくこころふくハ業奉のり方もあつびぬく  
之所乃所のりなりねんをくドおんるは陽行巫覡  
されぬ人といはるをさすくはるあり

古今事十... 乃ゆと後まろに教よ人をしむるはくはるに  
後之職負令曰  
乃當上せらるゆへに察しり女嬬といふ女はくはる  
乃ゆと後まろに教よ人をしむるはくはるに  
後之職負令曰







ひいおんかなんかひいおんかひいおんかひいおんかひいおんか  
乃あふまき

あるお初めは業平侍よあはれいこのうもあつらふや  
初めさく下向く遠道もあり業平兄弟又人を  
しくい 仲平 幼平 若平 大はき人 業平

敦津 淳朴 敦津

難波はささきささき乃浦とよあまむせささき海の中  
後援者七よささきささきささきささきささきささき  
を眺むあり下のささきささきささきささきささき  
ありささきささきささきささきささきささきささき  
ひく眺むありささきささきささきささきささきささき  
ありささきささきささきささきささきささきささき  
先はあはれささきささきささきささきささきささき

むいおんかひいおんかひいおんかひいおんかひいおんか  
乃あふまきささきささきささきささきささきささき  
ささきささきささきささきささきささきささきささき  
それをささきささきささきささきささきささきささき  
ささきささきささきささきささきささきささきささき

ささきささきささきささきささきささきささきささき  
山をくささきささきささきささきささきささきささき  
いとけりささきささきささきささきささきささきささき  
ささきささきささきささきささきささきささきささき  
ささきささきささきささきささきささきささきささき  
ささきささきささきささきささきささきささきささき







日頃くわんといふもさういふわんといふはなれ  
ど人目さきいふもえわんといふはなれいふ人なれ  
もなれいふの種もさういふわんといふはなれいふ  
とつたりよたといふもさういふわんといふはなれ

その母に世の本の字又病もいふもさういふはなれいふ  
とつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
の下旬いふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
ありといふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
もさういふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
よつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
いふはなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
とつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
もさういふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ

いふはなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
とつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
よつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ

おとといはなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
ふはなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
あつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
とつたりいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
いふはなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ

母はなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
はなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
いふはなれいふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ  
もさういふはなれいふはなれいふはなれいふはなれ

子つらう  
運





又徳大寺の所女あれはるり  
とてはるりたのりぞ治りなまら

願類抄巻第回

ひしれとてうらまのほくひりゆりきくふあは大徳のまこ  
りよをりくいはさく乃まきまらくまのひさきくれ  
前の所したあ一財かたると尾池へゆく修務へみえり  
財乃りよりたふむと修務名張の乃り目くらくらな  
ついでこのまらりくもく女まははる女まあり  
はくふくあくをくつとすくはるりある人か  
乃らめらあかやんはくまきまらくまのひさきくれ  
あまの今一後かまらんはくまかまを一毎よらつたま  
アまのなごふくまらくまらくまのひさきくれ  
ありくはるりあつた小野が配あなまをけり時  
乃系八十倍くまらくあはあぬと人よらけきよはるれは

願類抄



しつこくして侍務乃はありきや母のいそがしきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

せと女ありき人の心むきなりしつらきつらき  
ありきつらきつらき

はるのまきつらきつらきつらきつらき  
大後乃浦は松若わらぬつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

大後の月母のつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきつらきつらきつらき  
あつらひのつらきつらきつらきつらき

しゝがとて終勞乃國よぬく事とせん<sup>り</sup>く<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>く<sup>き</sup>なる<sup>を</sup>

わら<sup>も</sup>か<sup>さ</sup>ひ<sup>い</sup>ぬ<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>ほ<sup>ん</sup>と<sup>あり</sup>

<sup>大</sup>流<sup>乃</sup>を<sup>由</sup>よ<sup>た</sup>め<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>ふ<sup>ら</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>

か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

ち<sup>い</sup>か<sup>ま</sup>い<sup>ぬ</sup>く<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

の<sup>り</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

より<sup>飛</sup>渡<sup>り</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>り</sup>業<sup>平</sup>佐<sup>治</sup>國<sup>よ</sup>り<sup>あ</sup>ん<sup>を</sup>

く<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>く<sup>き</sup>なる<sup>を</sup>

あ<sup>け</sup>て<sup>は</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>ま<sup>か</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>ば</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>い</sup>の<sup>り</sup>て

よ<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

な<sup>ら</sup>ぬ<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

あり<sup>か</sup>ら<sup>ん</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>ま<sup>か</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>ば</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>い</sup>の<sup>り</sup>て

浦<sup>乃</sup>の<sup>由</sup>よ<sup>た</sup>め<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>ふ<sup>ら</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>

と<sup>い</sup>ひ<sup>て</sup>し<sup>る</sup>は<sup>あ</sup>り<sup>き</sup>ぬ<sup>べ</sup>し<sup>き</sup>

く<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>く<sup>き</sup>なる<sup>を</sup>

神<sup>乃</sup>の<sup>由</sup>よ<sup>た</sup>め<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>ふ<sup>ら</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>

席<sup>乃</sup>の<sup>由</sup>よ<sup>た</sup>め<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>ふ<sup>ら</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>

お<sup>の</sup>り<sup>は</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>ま<sup>か</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>ば</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>い</sup>の<sup>り</sup>て

と<sup>ん</sup>が

の<sup>り</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

か<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>ま</sup>か<sup>し</sup>め<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>は<sup>さ</sup>い<sup>の</sup>り<sup>て</sup>

く<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>く<sup>き</sup>なる<sup>を</sup>

ふ<sup>ら</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>ん</sup>ま<sup>か</sup>し<sup>め</sup>ら<sup>ば</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>い</sup>の<sup>り</sup>て

く<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>く<sup>き</sup>なる<sup>を</sup>

く<sup>ら</sup>の<sup>に</sup>く<sup>き</sup>なる<sup>を</sup>

あんな海も乃前あまのつらさそふらん今らん乃成  
なりと是も業平さあらんあまのり  
ちのあまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらん

みねとこ

源のそめまはるあまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん

せふあまのつらさそふらん

尤面白極向や背あまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん

参乃のりあり神よあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん

ひー二系乃名のまあまのつらさそふらん

あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん  
あまのつらさそふらんあまのつらさそふらん



林うくあるへは後を極老と記さるへはうくせは此  
 物類の事など何をもまへ一但陽成院ハ六親十一年去  
 之うへ子附二葉葉系平と云ふ親六年三月に退おの  
 修とまふ久乃也後終後乃時を東司不家も火や  
 月上の卯日十一月申子日十一日あり文徳の法御仁  
 年物あふのうけさるゑあふ教成院ふりて終くは  
 ことありんく乃終く終く終く終く終く終く終く  
 ことありんく終り

大要やなかり山をくふも八終代りとも終りひおし終  
 長乃もく後るふありあふもまも終終終終終終  
 天照を終とも終終終終終終終終終終終終終終  
 終の終終終終終終終終終終終終終終終終終終終

時系海せしゆは終ゆめ物と終つるん終り終代り  
 ちりくのふありんと終んああり終のあなりは是  
 あをむとも終もやんも終こと終て終よんを終く終  
 終ん終の終終終終終終終終終終終終終終終終終終

別動よ 江原才十雲天原時終終終五系原唯子ヨリ山終代  
 物終院前終車副二系名言子終終終終終終終終終  
 又中お終終終終二系終終終終終終終終終終終終終  
 終終終終

終ん終も終も終ひ終ん終ひ終ん終ひ終ん終ひ終ん終ひ  
 終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ  
 終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ終ひ

ちうんていなるんくうらんくうき物なりくらとんくう海  
こいあめらうおらとんきんらんあわうこくこのくくく  
のふんよくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
このくくくくくくくくくくくくくくくくくく

田村のんくくく溢号と文徳天皇とヤあるあり田也  
山城山凌さいんさくまいたためなるよくくく田むの  
はつしヤあり清和天皇とある尾崎のとヤクあり  
かき子良おん乃女なり文徳天皇の女清なりヤクそ  
らん海おりヤクとまり女海山科はあり清和天皇の  
海子ま雅信乃耐系信乃清建太元乃清海  
家り海子ま雅信の耐系信乃清建太元乃清海  
と雅信乃耐系信乃清建太元乃清海

城令のちら板子付成来乃さくくくくくくく  
くあり山さくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
この十九日はわくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
このくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
かうかんとくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
のくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
遠路くくくくくくくくくくくくくくくくく



ちびよこはくちやうくひあふひさあつよさありんと。後  
是のち人よあるを故より一れく制ありはひたりや  
幼弱の女中御深田位下敬原多賀実茂子太左衛門相女  
貞三年 貞治元年十二月十四日卒 幸約西三条ふ  
大臣相一男山科之親仲人康親王也 幼云人康親  
王仁明中阿比孫深田尹号山科之親云右太左衛門  
乃同十四年 薨田十二幼約二年あり幸約貞親  
八年十二月十六日太左衛門三十一 業奉貞親七年三月  
子保子恒もつわり女法年ハ天安二年に幸ハ二年教お  
遠よりいひ化善後追善施するぬえと云ありや  
天安二年に山科の事も故のらかりや幸約貞親  
後のより七の月らひひのころまで人不幸あり故も此

了幼弱の事預おも人の友ありや一月ありたりよ事あり  
りも又人康親王と御仲と中御うたりたりやつらよ事あり  
宮後さるはくちやうくひあふひさあつよさありんと。後  
たににんかまに道達院有幼約の女中御深田多賀実茂子貞親  
十三九廿八年とわり事約太左衛門保子恒もつわり貞親八年  
十二月に業奉右太左衛門貞親七年三月とわり人康親  
王幼家貞親元年也同十四年 薨とまの儀よりいひ女中  
乃幸也つらり貞親十三日よりいひあふひさあつよさあり  
幼之息見云ひ女法を天安元年十一月十日卒 幸約西  
あり一各文傳きども忍ぶるはれとも幸約太左  
御も恒もつらり貞親八年あり業奉右太左衛門貞親七年に  
あふひさあつよさあり貞親八年以後のら故一

凡そ此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に...

此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に...

此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に... 此の世に此の爲め此の世に...



とんちの仕振はりかこるりたるにきれ乃よめ家

床の申子親王の生進行ありを系紗平の姉は貞  
叔親のじよの進めやちやもあり貞叔親の母ハ業平  
乃姉よわらぬり仕振はりかこる貞叔親王の流にわら  
紗平の紗平こなるりたるにきれこる業平なりは貞  
叔親の母ハ業平こなるり後宮と舞入る人なり

ありよわらぬり仕振はりかこるりたるにきれ乃よめ家  
申子親王の生進行ありを系紗平の姉は貞  
叔親の母ハ業平こなるり後宮と舞入る人なり  
乃姉よわらぬり仕振はりかこる貞叔親王の流にわら  
紗平の紗平こなるりたるにきれこる業平なりは貞  
叔親の母ハ業平こなるり後宮と舞入る人なり

無きもあつて小秋万葉とんとつよふなり

あきハこがどののたつ時の人中ぬらぶとあんのひもわはれ  
中彼を紗平乃じよめめれらるなり

業平好美の人あきこもやと不義とくわらふりゆ  
貞叔親は流にわらぬり申子親王の母ハ業平の母ハ  
ひよとらるりたるにきれこる業平の母ハ業平の母ハ  
の流にわらぬりたるにきれこる業平の母ハ業平の母ハ

業平の家を早下とくつたり有流よ紗平家と  
不可得用惟こるる業平の母ハ業平の母ハ

お進はりそ志井とわらぬりたるにきれこる業平の母ハ  
た今業平の母ハ業平の母ハ

あまのあめくはりはつとひくぬと教ふいふるの  
初めよははしむるの二月のほこのりよまきまの  
かしく曲のまきまのくまわのくまを面白あり  
日まきまのくまわのくまのくまお遠くまきまの  
とまきまのくまのくまのくまのくまのくまの  
くまのくまのくまのくまのくまのくまの

ひくたのほのいすうちまきまのくまのくまのくまの  
よ六条のくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
祢重のほのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
乃ちくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

た乃ねいすうちまきまのくまのくまのくまのくまの  
元大細を五十一仁和三年没一位寛平元年寛平軍車七  
八月寛平七十二寛平没乃かくまのくまのくまのくまの  
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
といふまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
はろひまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
といふまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
の月まのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
わりまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの  
とがまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの





は河上と毎尺とありたり乃く其のいんりて業平  
は流くを推今くそあじのほらるるへ一はよひ浦乃  
りも養ちりあこそ母たるのこもあつらん

しーあまの刀のいかにあがりまをさるるのあ  
あひよのあまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ

推多のいかにあがりまをさるるのあ  
虎女のいかにあがりまをさるるのあ  
お母乃あまのいかにあがりまをさるるのあ

あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ

あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ

あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ  
あまのいかにあがりまをさるるのあ

乃欲くあいつまのふちもあまひいひ

いあんふんふんをうたふ人なり

らあまふんなり

らあまふんをいひて極の老くをいひて死をいひてあまふんをいひて

是を業平のわらふといふはあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

乃とてわらふをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

あまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて

いひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひてあまふんをいひて



後機子之上野家誰と云々他物終乃後之山乃獨也

とめひさしひさしありんるゆえ見よと家もあつ

きーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

しーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

おらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらー

後へきん少もあつ平地もあつ山もあつ

とめひさしひさしありんるゆえ見よと家もあつ

きーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

しーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

おらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらー

後へきん少もあつ平地もあつ山もあつ

とめひさしひさしありんるゆえ見よと家もあつ

きーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

しーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

おらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらー

後へきん少もあつ平地もあつ山もあつ

とめひさしひさしありんるゆえ見よと家もあつ

きーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

しーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

おらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらー

後へきん少もあつ平地もあつ山もあつ

とめひさしひさしありんるゆえ見よと家もあつ

きーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

しーきん少もあつ平地もあつ山もあつ

おらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらーおらー

あつてわうしつてり

三月廿四日風光州家為冷身共志今秋不  
預歸未到曉歸程是去との地あり人を志を行く程

きり業平のひらうこくはあまを授わうしつてり

かくしつてあうしつてりまうりまうりまうりまうり

くしつてりまうりまうり

くしつてりまうりまうりまうりまうり

くしつてりまうりまうりまうりまうり

くしつてりまうりまうりまうりまうり

くしつてりまうりまうりまうりまうり

くしつてりまうりまうりまうりまうり

くしつてりまうりまうりまうりまうり

乃山志林屏あまをいふとあうしつてりまうりまうり

たつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり

あつてりまうりまうりまうりまうり



物類乃地志のうららき業平のふりかゝるれ梅のま  
 ゆりよきとてやうり

びしれたるこゝろり身はひやうとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり

業平乃志こゝろり身はひやうとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり

凡そこゝろあつたてんまをくらり

孝子乃志ゆりつらつらとてあつたてんまをくらり

業平乃志こゝろり身はひやうとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり  
 こゝろちやうりつらつらとてあつたてんまをくらり

勅云伊豆内親王久親三年九月薨

一男のうららき業平のふりかゝるれ梅のま  
 ゆりよきとてやうり





とふありきまをさしあつていふにむらむらうたまたまは  
そめいふとあまのりさる

おののちあしあをたてあまのりさる

ひしつらうたわいこゝろあまのりさるあまのりさる

まをたはしあまのりさるあまのりさるあまのりさる

たふさうさうあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる

あまのりさるあまのりさるあまのりさるあまのりさる



い男の海を渡りて下りてまはしむる業平の日記に云ふに  
甲斐守の乃文津守あり時よわぬのをいふありは  
の此所や染所のまき丸集の海を渡りて下りてまはしむる  
なり業平の日記に云ふにい男の乃このころにまはしむる業平  
乃兄のまはしむるなり乃平をたぬる時ある下りてまはしむる  
系乃平天親十三年八月廿又日奉送すく物たぬる  
又十七月十五平昔をまぬるなり乃山のころにまわ  
るを破乃山のころにみくる人ありをたぬるなり乃成況  
なるにまはしむるなり乃破乃山朝浪朝白波を  
新乃乃のいふに山をまぬるなり乃のかりにみまはしむる乃の海  
の海物よりして取つて方相よりを勝りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり

されと云候ありもさ二十丈産のまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり

乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり  
乃の海を渡りて下りてまはしむるなり乃の海を渡りて下りてまはしむるなり



ぶをきまの物よとわるあどかしく是ハ漁人乃あなと  
 とせのひはくあまのまゆく目のくわらうるうらぶ獲獲  
 乃結指し徐縹を毛衣ハ湖のまきまきとあまの  
 かないあつたのうらうらありわらう一葉車也

ちやねの早ら海をこの葉うを舞まむこのわまれく次  
 鳴天のわらう又海をう舞うあはれくこの葉まきく火の  
 とあり背やまらうこのわらうこの葉う又文をまの波は  
 ならやあまのわらうのわらうこの曲まらうこの葉は  
 一この葉う時をたう又文をまらうこのわらうこの葉まきく  
 国まのまなるあはれがめんこの海はまき乃わらう海  
 とあつてひくこの葉まらうははれまきあつたわらう  
 波のまらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう

あはれはれせしき一ありあはれはれまらうこの葉まきく  
 とわり 船風乃あつたわきまあつたわらうこの葉まきく  
 らあつたわらうのまらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉ま  
 きくこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう

とあつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう

あまのわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう  
 一あつたわらうこの葉まらうこの葉まらうこの葉まらう







くらりしたるあゝいせいのかたにおほしきあつて  
 上とあつていせいの後務が初推多とあつて  
 一月目の初もあつていせいのあつて  
 二月目の初もあつていせいのあつて  
 三月目の初もあつていせいのあつて  
 四月目の初もあつていせいのあつて  
 五月目の初もあつていせいのあつて  
 六月目の初もあつていせいのあつて  
 七月目の初もあつていせいのあつて  
 八月目の初もあつていせいのあつて  
 九月目の初もあつていせいのあつて  
 十月目の初もあつていせいのあつて  
 十一月目の初もあつていせいのあつて  
 十二月目の初もあつていせいのあつて

初免共去のあつていせいのあつて  
 後推多のあつていせいのあつて  
 二月目の初もあつていせいのあつて  
 三月目の初もあつていせいのあつて  
 四月目の初もあつていせいのあつて  
 五月目の初もあつていせいのあつて  
 六月目の初もあつていせいのあつて  
 七月目の初もあつていせいのあつて  
 八月目の初もあつていせいのあつて  
 九月目の初もあつていせいのあつて  
 十月目の初もあつていせいのあつて  
 十一月目の初もあつていせいのあつて  
 十二月目の初もあつていせいのあつて

二月目の初もあつていせいのあつて  
 三月目の初もあつていせいのあつて  
 四月目の初もあつていせいのあつて  
 五月目の初もあつていせいのあつて  
 六月目の初もあつていせいのあつて  
 七月目の初もあつていせいのあつて  
 八月目の初もあつていせいのあつて  
 九月目の初もあつていせいのあつて  
 十月目の初もあつていせいのあつて  
 十一月目の初もあつていせいのあつて  
 十二月目の初もあつていせいのあつて



關勢抄第九

ひしおとこわりたるはいつもきくをのれとも極む娘よを  
已後よれともをききとよま申ありをれともぬふお  
ら母と聞物いひとせたり女うふまてく人まをれは  
うねよをまわりたるはははれこの物もさくひといひ  
うねとせたりをりともを心おといはうくをのゆゆ  
よ今あてくぬまをいひとせたりとれ人とれ人をい  
はへともれよあんわりたるははははははははははは  
まりたる時をぬ<sup>かま</sup>いなるを

その男をぬとぬまより葉葉平の女と<sup>こぼろ</sup>経別よりありは  
おともをれと他人の嫁とまよとも女の腹を<sup>み</sup>子われ  
とも人の男乃ち河くいひともぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

たるをうたぐといひきり今乃男らとまきまひありと  
 根なり流うとくちまふさ〜せ〜との後あり漏のま  
 之後國は税よら嘲弄乃味まといえ終りわさ〜とよえ  
 てなるも由流何〜と税は税は税中はま〜く漏〜  
 ち〜とあり只漏〜と流〜と〜とま  
 伏乃税はまら〜と相も事やが〜と母らりや〜とまら〜と  
 能の税をえ今乃男は能く去をたすとの男はた〜と  
 あり伏乃税はま自と〜とあり尚まよふ乃漏のゆ也  
 有能とま意か伏乃相なり能よ事や流〜と〜とま  
 一らと今乃男は〜と〜とあり〜とま  
 と〜とあり〜とま〜と

うら伏ひ〜のまよ〜と〜と〜と  
 伏ひ〜とせ〜と〜と〜と  
 と〜と〜と〜と〜と  
 事相なり能も能事と〜と〜と  
 ありよんをば〜と〜と〜と  
 能よ〜と〜と〜と  
 ひ〜二条乃能よ〜と〜と〜と  
 け〜と〜と〜と〜と〜と  
 面〜と〜と〜と〜と〜と  
 と〜と〜と〜と〜と  
 能〜と〜と〜と〜と

二条能よ〜と〜と〜と  
 一と〜と〜と〜と〜と

江戸の事... 二条... 江戸...  
江戸の事... 二条... 江戸...  
江戸の事... 二条... 江戸...  
江戸の事... 二条... 江戸...  
江戸の事... 二条... 江戸...

七... 舟... 舟... 舟...  
七... 舟... 舟... 舟...  
七... 舟... 舟... 舟...  
七... 舟... 舟... 舟...  
七... 舟... 舟... 舟...

一... 舟... 舟... 舟...  
一... 舟... 舟... 舟...  
一... 舟... 舟... 舟...  
一... 舟... 舟... 舟...  
一... 舟... 舟... 舟...

洗... 舟... 舟... 舟...  
洗... 舟... 舟... 舟...  
洗... 舟... 舟... 舟...  
洗... 舟... 舟... 舟...  
洗... 舟... 舟... 舟...

見... 舟... 舟... 舟...  
見... 舟... 舟... 舟...  
見... 舟... 舟... 舟...  
見... 舟... 舟... 舟...  
見... 舟... 舟... 舟...

いあんはあしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
はうなういせき<sup>くさ</sup>らんくわいせいのあがり業平のしんあゆん  
しんあゆんはあしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
らあゆんはあしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
はあしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん

よ乃何まのうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
人をいせしんをうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん  
あしうていしんからけいせいのあがり業平のしんあゆん

海士乃うみさうくくのことと見見扱けんけんよちわりのうまる人

と呪のろひまらす地神ぢじん中ちゆう宮みや火ひくらむ見見けんけんとし中

神かみのままま火ひ神かみ命のみこととしれり海うみさりは二神かみさら

人ひとさらあまのし時ときは物をしもひ給たまひまらす給たまはり給たまはり

あまさらはりあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

神かみ乃なさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

はりをしもひ給たまはりあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

神かみのまままあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

はりをしもひ給たまはりあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

くらひまらす見見けんけん神かみ中ちゆう宮みや火ひくらむ見見けんけんとし中

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

神かみ乃な命のみこと 自こらら海うみ幸さち 神かみ乃な見見けんけん自こらら海うみ幸さち

乃なのまままあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

あまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさらあまさら

とも方て松花むいひきみあられたるうしあめしとてふに業平  
 の家のうひのりど家とまき女より死あまのちあれはとちえ  
 物りあするもやあらんと旦のそとにけ物流を頼云又ふい  
 けしきりあもしとてあへまじとて初た云業と敬といふは  
 とうらののこしとあふとていふをけいへしとて他人のあ  
 ぬよまきとてあふとて春蝨むくれく見見よし字と出され  
 ことりば依よなむとてあめむくはきを男とて云るうか  
 とそり一歳とてとて松花

けしきり海乃松花いあうらまきとてけいあそりけり年しらの

賀九条の家とてせとて進々目申約ありとてあれたるけ

くらの劫物云照言云基徳貞親十一年八月廿一日太後た

大御三十七年秋十七年甲子業平十九年正十又けり

申約十賀不意松河乃太後が九条あて年賀貞

親十七年之申約け時業平とて未申約よ性せとてぬよ

むら松花とてとてなる人

松花りりかひくの進むひくのちんとてあたるみらまよふ

在今集才七賀の言よのりりらまひくられけり

てい流くもかたぬあうよわし今む乃あへまらぬま

よあうよとてありあてえうのまよ自のほ賀とて松

ゆたせいのよりとてとてあり後松のまかぬとて松よとてりまきと

ひりの面白とて許せらまき

けしきり松花いあうらまきとてあゆらおとてけりけり

うさる松花とてあう松とてあまよ梅乃けりけり松よとて

けしきりあてまの松とて



太政大臣忠仁多し幼抱云忠仁公天安元年二月十九日  
太政大臣又四月九日授一位二年十一月攝政清和  
和二年清和天皇九年多し位は清和世終ふ所攝政  
始り初るそ又親十年九月二日薨六十又堀河乃太政  
大臣とそ又藤原の世と中世忠仁公ハ溢号と良秀之  
はより傳つる男業平忠仁公乃幼抱云れり

此のじまろあふとわら親御もまろぬ抱てそまろ  
他り授とあり今まろ月を梅のま何がよ抱まされし  
御とまろぬとあり御いと難まろと難まろあり忠  
仁公と親をよまろありまろ親とそ外まふあり忠  
そとそ在今集書十七雜書上題まろとそと人志と  
わりまろまろまろ親とまろと在治まろ人のいとこれ  
まろ親乃抱い御いとまろこのありとま忠仁公の御ま  
まろまろまろまろ御いとまろ

と親まろまろまろいとわあたるまろ親のいと  
よ海く始りまろ

いあそ幾どく使まろ孫あそ孫あまろ

ひく太直乃ら幼のひわら忠目ひつおまろまろまろ  
車まろのふお下とまろまろまろのまろまろまろ中  
アまろおまろまろまろまろ

ひわりのまろおあ忠一乃親候とそ秘まろまろまろ  
秘まろまろまろまろまろ一条より太直乃まろまろ  
まろよりまろ太直のまろら太直まろ毎年まろ  
わそまろまろまろまろまろまろまろ

て弓あつるのありき自らたぬわるとはげひの目むさの  
わるとはげひの又自のたぬのあきとけはひあり是とひわり  
乃目と云のたぬとけはひの時全人々と禍を引たりとら  
初よひおりのと云るりわるとはげひの日體あきたるとら  
るとはげひのありあきとあきとけはひといけりといはげ  
乃是法と云ととと競うといととわうと用がととと  
成するあはたぬとゆよおととととととととととととと  
乃下と云ととととととととととととととととととととと  
てととととととととととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととととととと  
うととととととととととととととととととととととととと

かんをわるといふことよめ人のきくいあやあきとらあきとら  
右今世中十一意のあきとらあきとらあきとらあきとらあきとら  
この目じりひのあきとらあきとらあきとらあきとらあきとら  
乃のあきとらあきとらあきとらあきとらあきとらあきとら  
とわりあきとらあきとらあきとらあきとらあきとらあきとら  
是と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と  
ひあきとらあきとらあきとらあきとらあきとらあきとら  
是と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と  
加筆

あきとらあきとらあきとらあきとらあきとらあきとらあきとら  
是と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と  
知と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と

そとへんあましとく大に相換はさびなまのおもひからりかた  
 ねはなまめしと知くうきくまのたゆはらあまのうきれお  
 りもとわりていそとそよまふうよらりあまのいあな  
 のうらんとまよるしるまら  
 のらちらあましとありのまらり

後よわひさういあり

ひく相くは後原あ乃い海なこらこままてわらるん  
 とまは人まはつわひよりまはれまをたのまらこわらと  
 ていつこせまのりままをなはらるん  
 後原あ乃く海なの方よわこまは後原あと号は清原  
 後とまらと後原あとのまはらりまら海はあのみこ  
 ひらりあましとあはは房いれままら一まらあまらのみまら

とやいこく業平の海もあまも同らうんま業平あ  
 わらりまもまあにんまらあまらあまら一まらいゆりえ  
 あまらんまらんとりひらまらりあまのらり意我あま  
 まらあまらまらり思あま思ま同まらり核乃まのまら  
 りいひ思あまらりいひ思あま思まらまらまらまらま  
 とまらあまのいまら乃形らとまららとせらあ一思くまら  
 ひらあまら思あまらら思あまら思あまら思あまら思  
 思あまのらま思あま思あまら思あまら思あまら思  
 思あまら思あま思あまら思あまら思あまら思あまら  
 思あまら思あま思あまら思あまら思あまら思あまら  
 思あまら思あま思あまら思あまら思あまら思あまら  
 思あまら思あま思あまら思あまら思あまら思あまら



此の事は... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...

此の事は... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...  
 業平乃... 業平乃... 業平乃... 業平乃...

あつたなりぬいなり中ち連ハ親族なり

きつとそまきよのめおむかひのけいしんもまもるべきこと

ほまよかりくむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

まもるむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

出入ありくむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

まもるむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

むかひのれまもるむかひもむかひもむかひもむかひも

とまひひなりくむかひもむかひもむかひもむかひも

背負ふよきとむかひもむかひもむかひもむかひも

むかひもむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

むかひもむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

海もむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

人をあひひるむかひもむかひも

口を業半ありむかひもむかひもむかひもむかひも

とまひひるむかひもむかひもむかひもむかひも

実なる人むかひもむかひもむかひもむかひも

門仁の天のむかひもむかひもむかひもむかひも

網なむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

まもるむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

ら見見むかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

わりむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

給ぬるむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

右今作業才十三よ入りむかひもむかひもむかひも

むかひもむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

むかひもむかひもむかひもむかひもむかひもむかひも

まゝに記すは人の心事をあらわすに海はるる  
とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

業平の日記をよみて海は思ふとあるなる見ゆ

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり

とてかゝるなりとてかゝるなりとてかゝるなり





尚志よりひびく神代よ神代をわりの志を神代よ  
 ともかくもくもくいふことありしやうかたの  
 たりともおぼえしき流るるありあまうり  
 乃ぬふく海河乃も同じ神代をももつたし  
 しわらうもつちかたのつかりたる人をも  
 元よるくろ考原のつむぎのつむぎのつむぎ  
 ぬもつちかたのつむぎのつむぎのつむぎ  
 せんやふらぬりるれぬわたりなる人わんをさく  
 てもつちかたのつむぎのつむぎのつむぎ

わるある神代業平もつちかたのつむぎのつむぎ  
 平乃妹なりしを山男乃ぬあせり人のぬり母り  
 貞観九年丙午十二年  
 大内記

うらうらとめくものありあふめく後撰平乃のあま  
 他志く父もおぼくも女乃父もあふめくありあふく  
 ら後たり路たりしとわたりしあふめくありあふく  
 あらぬくしとわたりしあふめくありあふく  
 あらぬくしとわたりしあふめくありあふく  
 ねがひしとわたりしあふめくありあふく  
 とらんともく業平乃父のつむぎのつむぎのつむぎ  
 うのん志さゆあり業平乃妹もつちかたのつむぎのつむぎ  
 つあふめくありあふめくありあふめくありあふめく  
 ありあふめくありあふめくありあふめくありあふめく

かいらやとらふらふあり

海神

十一

海神くのおあまはまらる海神のひもくわわ

右今身十二意あまのいそ海神は業平物乃家よ

かうせ乃のおおまらるけらるはまらるはらるの

まあめらるはつれくわらるあまらるはらるは

らまらるはらるはらるはらるはらるはらるは

らまらるはらるはらるはらるはらるはらるは

らまらるはらる

海神くおあまらる

海神くおあまらるはらるはらるはらるは

いあ乃約まよらやららてはららるはらるは

のららるはらるはらるはらるはらるはらるは

らららららららららららららららららら

いあ乃おあまらるはらるはらるはらるは

らららららららららららららららららら

乃まらるはらるはらるはらるはらるはらるは

らららららららららららららららららら

とらららららららららららららららららら

あまらるはらるはらるはらるはらるはらるは

らららららららららららららららららら

はらららららららららららららららららら

らららららららららららららららららら

らららららららららららららららららら

らららららららららららららららららら

らららららららららららららららららら

海神

十一

あせらちちのめくればならし初まの女を敏行の家と申す  
く後乃らめなるまを又別は月全の竟老の信と申  
家なりと申すとればいふも回能なりとては院  
ちりといふひ方乃幸わらひ

ねこよひのねと申すと申すはたさく雨を波と海と申す  
しあ古今中十のよふら河津は若原のよふとい物言  
乃業平の家なりと申す世をわひしとて文法をせらる  
ふしはよふ今申すとてぬりなりとてはかんと申す  
ゆるといふりたるは中のかたぬりなりとてはかんと申す  
乃業平物言とわりと申すは減丹のひよとてはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
かりとてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す

とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す

ひう女人乃らぬ振  
風吹といふは波とてはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
とてはかんと申すはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
むまり風吹といふは波とてはかんと申すはかんと申すはかんと申す  
ぬく流といふは波とてはかんと申すはかんと申すはかんと申す

ありといふあり

とはひのいへんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
 業平乃ぬきまていへんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
 業平とよもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 うひしは青のるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 とあへは舞うあともひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 かしはひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 ちくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ち波がくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 又一統のちびぬららららららららららららららららららららら  
 節よそれよあへんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
 海にいへんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

あつておのひよはたてとててて

ひいおとてあつららる人なうもあつららるいよありらる

業平のあつららるてんてんてんてんてんてんてんてんてん

花より人そあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 古今業平十六巻傷乃あつたり他志紀義弘とてあつてあつて  
 友則とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 人を殺あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 ちいおとてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 ちあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



夢見しつゝあまのつとひものごえを人からまてあつて  
 女乃ちつよよのりかおれしとつとひものごえをいふ  
 一向よりわらへしつゝあまのつとひものごえをいふ  
 ちるつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 の下細いなるつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 まつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 才十一よ入るり たふさふ つとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 とんをそれとあまん 作人 下細のちるつとひものごえをいふ  
 くよかちるつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 お遠せり又種茶あはせり化志のそとにけりあまのつとひものごえをいふ  
 へつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ

とぬ乃種茶の垣屋く種茶とつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 右今集才十のつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 の神より種茶つとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 種茶つとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 ちるつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 あり種茶つとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 く種茶つとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 ひつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 女よつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ

あつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 又文字よつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ  
 じつとひものごえをいふあまのつとひものごえをいふ



井はきく事と云 ころ山浦幸治母一せり海乃み代の  
 おるあともまきりと同日のしん高物海はよめ三用よく  
 さるのさき世世地入るり物を秋まの海世用乃とのとに  
 世に結の美理がゆめさる物くくく世世のしん海税をり  
 なるれし人なるがめさるる交さるりともさるりもさるり  
 ねらめさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 甲今日さ一代一方乃海邊のり幸るまじし海邊一  
 く極よ世と人なるがめさるりさるりさるりさるりさるり  
 海へ世とさしたるれさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 籍まじまきり

杉原のしんまわもさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 とあつめ人なるまきりさるりさるり

此乃海ふよきさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 十一乃あつめさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 ありあつめ乃との重標をさるりさるりさるりさるりさるり  
 とかたさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 海さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 とそ今ドくく此門の親父な味つさるりさるりさるりさるり  
 さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 色無海法縁園の抽母もさるりさるりさるりさるりさるり

びさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり  
 さいさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり



のまゝに...  
15

おまゝの...  
16

右今より物の名は...  
17

他物...  
18

おまゝに...  
19

おまゝに...  
20

おまゝに...  
21

おまゝに...  
22

おまゝに...  
23

おまゝに...  
24

おまゝに...  
25

おまゝに...  
26

おまゝに...  
27

おまゝに...  
28

おまゝに...  
29

おまゝに...  
30

おまゝに...  
31

おまゝに...  
32

おまゝに...  
33

おまゝに...  
34

おまゝに...  
35

おまゝに...  
36

おまゝに...  
37

おまゝに...  
38

おまゝに...  
39

おまゝに...  
40

おまゝに...  
41

おまゝに...  
42

おまゝに...  
43

おまゝに...  
44

おまゝに...  
45

おまゝに...  
46

おまゝに...  
47

おまゝに...  
48

業平乃舅の正何れもあつて終りつゝも思  
 會て之傳し背受の文など乃に傳くならん一もよお  
 せり紙巻も於て他傳説業平安のふり

ひりみりともあつては初母一のひり

文徳天皇天安元年約事として之國史より之を採  
 りて見ても新古今よひ初乃として後者母約事  
 一時とのさる重姓の流門名約事として見ても  
 國史よりある一様ともや

承和も久くぬれとて此のぬれ松少代ぬれ  
 古今集卷十七より人あつて乃のあし文徳天皇の流  
 と云不後用業平のあありと之見くあ乃ふぬあり  
 ぬれ松少代小松とて之とあぬれ松少くひあふる

一づく世伝がしてあつてとて

おのん非業もやと志路ひく

業平の現形もや非新乃あつて重あすなかり松代  
 者乃大ぬ非と中もむいぶれぎ乃んとしてひく一  
 揚のわたささるあくぬれあひ一時かよひ  
 ころひあつたれ松少非大よりあつて

よそこのいさし中傳わつてころを伝はるのいさし  
 非もはく一のあつて乃の社と申りつゝはくは中  
 傳かうもはくおと申り乃の社と申りつゝはくは  
 ひとあつて非切曾名三韓をうらむあつて乃の三非  
 乃ち後非とわつたれ終ひてころひあつてあつて  
 と志く人ぬれ乃のあつて乃のあつてあつて





家にははききあへん心はしん人なるんかんととありん  
こそ人の教せんとしり

同書上

三十一

ひねるこもはかこりあるはまの人の心ついでに  
うひまの花をぬきかきさるるおのころはなむ  
惜るまよき柳とていふはなむさくしひまのぬき  
おこもむめ乃らおかいたるまのころはむめはか  
ちとせぬかきくしひまの花をぬきかきさるる  
ありを似合たり梅壺家金のはま乃らさるり

か

うひまの花をぬきかきさるるおのころはなむ  
惜るまよき柳とていふはなむさくしひまのぬき  
おこもむめ乃らおかいたるまのころはむめはか  
ちとせぬかきくしひまの花をぬきかきさるる  
ありを似合たり梅壺家金のはま乃らさるり

是らなるをころあふありあはしあはしあはし  
對しくかきとむさんとあり思ひはたどりてさるり  
おひをほきよそれかかきくかきかきくかき  
あふまてあねとぬきかきかきかきかきかき  
そ是もあひとあかきありあはしあはしあはし  
おまよあまあひひまのぬきかきさるる  
さうおとこころはむさくしひまのぬきかき  
きりなむさくしひまのぬきかきさるる  
おら乃らあひまのぬきかきさるる  
一はまのあひまのぬきかきさるる  
遠のあひまのぬきかきさるる  
ほのあひまのぬきかきさるる

同書下

三十二









天孫本之奥書曰

業平朝臣

正和元年阿保親王九男

平城天皇皇子

母保皇親王植武才八女母南子後三位

年月日任左近少輔

正和十年正月補左近少輔

年正月七日退五位下

貞觀四年正月七日退五位上

年二月十日左兵衛督

六年二月八日左近少輔

二月九日右少輔

十一月七日退五位下十五年正月

七月退四位下元亨元年正月十日左近權中

廿一日退四位上二年正月十一日相模守

人以其年正月十一日美濃守同廿月八年

親王

平城才三

母五位下蕃良友繼女

天保九年十月薨

贈一

國

年一

仍年以

河保親之男

天長三年

仲年

仍年

仍年

業年賜姓

在系仍長承和七年正月為人十二月轉退廿日退五下廿

四十二月二日仍退十二年正月退五上任左系仍退五下廿

少仍仁壽三年正月仍退下仍退二年正月仍退仍退仍退仍退

興平大捕天安二年二月中勢大捕仍退仍退仍退仍退仍退

正月攝方与仍親二年六月内退以八月廿六日仍退仍退

占交四年正月仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

六年正月十六日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

正月正月位下十年正月仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

三日系仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

人以仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

日別蓋六年正月申納之六十八年正月三仍退仍退仍退仍退

元年按察同三年四月十三日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

紀有常

天和十一年正月十二日大系仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

廿六日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

又日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

又日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

年二月十一日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

七年二月十七日仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退仍退

綱目

三二二

年正月廿三日卒年六十三

二条名中納言左近門督賜太政大臣長良女

母紀休守総継女

貞觀元年十一月廿日没又任下 又皇女藤原同八年十

二月女清宣旨九年正月八日正五位下十年十二月廿六

日生弟一白皇太子十七帝法年十九

十一年二月立為皇太子十二年正月八日没三位元壽

九年正月三日良位日之為中宮成六 六年正月七日

為皇太子文宣元年九月廿一日傳位延喜十年

十二月薨六十九天壽六年八月退級后位

河原入大臣權 暎詠才十二源氏

義和六年十一月廿七日正四位下元服日六年壬正月一日

傳後八年正月お換也九年九月己亥逝也十又年二

月右近中納言兼左近也右近三年正月七日没二位又月

衣束門督仁壽四年八月兼修勢也女衛三年九月任

後左近門督修勢也女元

リぞんぬ

弟紫葉才十八

弟ふこよる死にてまじりひ

はくまにがうんそのまゝはひ

六姑方

そくえいしめゆゑのゆゑあはれ  
よしめゆゑあはれとてふ人もあは

宋玉神女賦

索價幹之醜之矣志解恭而體閑

曹子建洛神賦

環姿艶逸 儇弱體閑

まろひ きれひのおとこ

こころのゆるぎなきまろひのおとこ

天後二年正月廿日己未申刻凌案門之盲目連日風  
雷之中遂以書寫為後漢之流也

同廿二日授辱

世間流布之由奧書獨裁之仍然之也  
三代天孫云云九菜四年二月廿八日辛巳  
太迺素樞中御海素樞在系御  
加守和河係親王弟又子正三位中納言  
河係親王女御武天皇皇女修内親王  
年親王上表曰吾弟高岳親王之男女  
先傳王弟賜物  
良姓之子息也  
素樞是神年  
自開麗叙  
不約海

光仁天皇  
 授後五位上  
 天長二年二月拜左衛門少尉  
 遷左近衛少輔  
 長祿元年  
 遷右近衛少輔  
 中納言  
 長祿元年  
 遷右近衛少輔  
 十六

光仁天皇

桓武天皇

孝德天皇

孝元天皇

贈元

平城天皇

問保親

大江音人

在原行平

在原守平

在原重平

在原仲平

棟梁

元方

右少輔

師尚

子孫見被流

滋春

高階峯者為子

深草帝

田色帝

惟喬親王  
 女元靜子  
 名虎女  
 母孝子

嵯峨天皇

仁明天皇

文德天皇

清和天皇

陽成天皇

西院帝

淳和天皇

光孝天皇

恬子內親王

觀十二三太子

出宗子內親王

人康親王

母同惟喬

貞教親王

仁宗

山崎天皇

貞觀元年

母行平女

才七  
賀陽親王

才三  
女

修夏内親王

天皇之妻馬之族為尼

右大臣右内磨一男

日野元祖三木刑名

真夏

源成

家宗

繼蔭

女子

馬少爺

三木九太郎

大和傳与守

木三次

源融

才二十  
弟十三日院也

相模守  
没立上

源之

才十  
弟十三日院也

源舉

源順

大納言

没立上

没立上

弘蔭  
母出蔭也

字合

磨繩

吉野

良道

女子

女子

女子

海軍云  
後鳥羽

木大納言  
三木

太皇太后  
中納言

右大臣

左大臣

夜鶴抄作者

行成

行成

行成

行成

行成

行成

行成

世系

三跡之内權跡

一切跡之内權跡

内磨 真夏

日野家祖

後長樂殿太政大臣  
右大臣内院殿太政大臣

冬嗣

長良

基經

時平

仲平

順子

兼和土室女院没立三子  
三木中官左大臣四十六皇  
太后没立三十九入道

木中左衛門尉  
豐太政大臣

女子

女子

女子

明子

天安二十七年中官清和即  
位日貞親六十七皇太后元  
孝六十七皇太后天皇  
元服日依祖母也

良房

基經

忠平

師輔

昌泰三困十二三崩

高子

貞觀十九年二月廿七中  
天皇  
孝天皇皇太后天皇元服  
日八年二月出内裡过三條院  
安平九年二月遷居延喜  
十年十二月崩六十九  
天保六年正月追復后体

良相

女子

女子

女子

温子

安平九十七廿六中官昌泰三  
七廿三皇太后延喜七十八崩号東三条

女子

女子

女子

明延五

三十六



と用<sup>ヨウ</sup>控<sup>コウ</sup>せしむ<sup>シ</sup>邊<sup>ヘ</sup>際<sup>サ</sup>の<sup>ノ</sup>多<sup>タ</sup>分<sup>ブン</sup>入<sup>ニ</sup>願<sup>ガ</sup>願<sup>ガ</sup>結<sup>ケツ</sup>云<sup>クモ</sup>は<sup>ハ</sup>終<sup>シウ</sup>則<sup>ソク</sup>并<sup>ヘ</sup>  
莫<sup>ム</sup>多<sup>タ</sup>也<sup>ヤ</sup>とい<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>願<sup>ガ</sup>願<sup>ガ</sup>を<sup>ヲ</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>に<sup>ニ</sup>抄<sup>シウ</sup>出<sup>シュツ</sup>み<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>ん  
あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>や<sup>ヤ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>や<sup>ヤ</sup>とい<sup>ト</sup>ふ<sup>フ</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>子<sup>シ</sup>時<sup>ジ</sup>文<sup>ブン</sup>孫<sup>ソン</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん  
仲<sup>チウ</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>又<sup>エツ</sup>日<sup>ニチ</sup>よ<sup>ヨ</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>と<sup>ト</sup>お<sup>オ</sup>も<sup>モ</sup>い<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>

法中<sup>ホウチュウ</sup>表<sup>ヒラカ</sup>旨<sup>シメ</sup> 在<sup>ニ</sup>判<sup>ハ</sup>

此<sup>コノ</sup>願<sup>ガ</sup>願<sup>ガ</sup>抄<sup>シウ</sup>出<sup>シュツ</sup>み<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>子<sup>シ</sup>時<sup>ジ</sup>文<sup>ブン</sup>孫<sup>ソン</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>  
之<sup>ノ</sup>時<sup>ジ</sup>作<sup>サク</sup>れ<sup>レ</sup>い<sup>イ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>子<sup>シ</sup>時<sup>ジ</sup>文<sup>ブン</sup>孫<sup>ソン</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>ん<sup>ン</sup>

慶長<sup>ケイチャウ</sup>第<sup>ダイ</sup>二<sup>ニ</sup>孟<sup>メイ</sup>冬<sup>トウ</sup>十<sup>ジュウ</sup>又<sup>エツ</sup>日<sup>ニチ</sup>

也<sup>ヤ</sup>是<sup>シ</sup>由<sup>ユ</sup>又<sup>エツ</sup>素<sup>ソ</sup>定<sup>テイ</sup> 在<sup>ニ</sup>判<sup>ハ</sup>

柳<sup>ヤナギ</sup>馬<sup>ウマ</sup>場<sup>バウ</sup>通<sup>トウ</sup>二<sup>ニ</sup>條<sup>ジョウ</sup>下<sup>カ</sup>町<sup>チウ</sup> 新<sup>シン</sup>板<sup>イタ</sup>

萬<sup>マン</sup>治<sup>ジ</sup>二<sup>ニ</sup>年<sup>ネン</sup>刻<sup>キョク</sup>八<sup>ハチ</sup>月<sup>ゲツ</sup>吉<sup>キチ</sup>且<sup>ツ</sup> 吉<sup>キチ</sup>野<sup>ノ</sup>屋<sup>ヤ</sup>權<sup>ケン</sup>兵<sup>ヘイ</sup>衛<sup>エイ</sup>板<sup>イタ</sup>行<sup>キョウ</sup>



